

タイトル:平成 24(2012)年度 教育セミナー

日時:平成 24 年 9 月 14 日(金)～17 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「南タイのイスラーム復興運動—ダワにみる新しいコミュニティの可能性」

西井 涼子 (AA 研)

フィールドワークは、人類学がよってたつ方法論とされ、人類学者にとってはそれを通過してはじめて人類学者になる通過儀礼のようなものであるということはしばしば言われる。しかし、近年、フィールドワークはさまざまな分野で用いられ人類学の専売特許ではなくなりつつある状況がある。私にとって、今年が初めてフィールドワークに入って 25 年という節目であり、あらためて人類学にとってのフィールドワークの意義と、自分自身にとってのフィールドワークの意味について考えてみた。また、それと同時に私のフィールドである東南アジア、特にタイにおけるムスリムの実態を紹介した。具体的なテーマとしては近年のイスラーム覚醒・復興運動であるダワ運動をとりあげた。

ダワ運動の一つ、タブリーグ・ジュマート運動は、1930 年代年代にインドにおいて、西洋との対峙において始まり、タイには、1960 年代に紹介され、都市部に居住する南アジア系ムスリムを介して広がった。南タイの調査村においても 1990 年代以降徐々に浸透し、2000 年には、村でもダワの活動に従事する人々が現れはじめた。その変化は、それまで酒のみムスリムだった人々が、うってかわってイスラーム実践を熱心に行い、モスクに集う姿に顕著に現れてきた。新たなダワ運動に従事する人々が、新しいコミュニティを形成しているのかどうか、復古主義ともいえる原点回帰をめざすタブリーグ運動の理念・イデオロギーによる活動自体は大きく変化しているとはいえない現状で、なぜ今こうした運動が広まり、そしてどのような事態がひきおこされているのだろうか、といったことをダワ運動に従事している人々の実践から考察した。